

2. 知床半島行 昭和40年春（第二次）

和田徳之

大阪を出発して3日目、3月9日、ようやくのこと現地連絡本部である知丹別的小野塚氏宅につく。大阪から離れること1500kmあまり。この知床は一面雪におおわれ春の訪れはまだまだの感じである。ここ知丹別は知床半島の東側にあり、一方を知床山脈がおしよせ他方を根室海峡に面し、そのごくせまい海岸線を一本の道路が走り30~40戸の家が道路の両側に点在している。また根室海峡をへだてて国後島が手にとるように望める。やはり日本の果という感じがするし、これから岬の方に進むにつれては、よく言われる「地の果」の感もしないではない。

夕食後小野塚氏をかこみ我々の計画を話しこれに關して、小野塚氏の経験からいろいろと参考になる話を聞く。

3月10日（①-※） 本日は予定通り1名を食糧整理のために残し、3名でトツカリムイ（オシヨロツコ川口）からの取付点の偵察に出かける。トツカリムイまでは海岸線であり起伏もないで楽に行けると考えていたが、いざ歩いてみると積雪が多いうえに海岸線であるため雪がしめって重いのである。

海岸線にはおしよせて来た流氷が広がり、又それが氷山のごとくもり上がったものもあり、北海道ならではの景色である。トツカリムイに着くころには天候は急変し吹雪となって来た。取付点をオシヨロツコ川の左岸とし、もうひと頑張りしてトツカリムイ岳北のコルへの目やすをたてた。（出発8:10 ルサ川9:45 トツカリムイ11:40 300m地点14:00 トツカリムイ14:35）

3月11日（※吹雪） 夜半から猛吹雪であったので今日の天気が心配であったが、やはり吹雪である。この小野塚氏の家が海に面しているためもあろうが、ものすごい風である。家の柱がみしみしとなる。大阪ではこんな風は台風の時ぐらいであろう。仕方なく今後の打合せ等を行い明日に期待をかけた。

3月12日（①-○風強し） 風は強いが好天である。冬用テントと全行程16日分の食糧をかついだ我々4人は、海岸線のラッセルを手始に知床岳へと

歩を進めていった。途中ぎっしりとおしよせた流氷の上をラッセルをはぶくために歩いた。この流氷の間をぬって小さい漁船が勇ましく活動している。我々はスキーが下手なのでスキーを持って来なかったが、いかに下手といえどもこの海岸線ではワカンに比べ相当楽にいけたのではないかと考えながら進まさるを得なかった。そしてこの日はオショロツコ川をわずかに上った風の当らぬ所にテントを設営した。念のため一昨日のルート工作のあとを確めに出かける。第1日目が比較的スムーズにいき歯車が餘々に動きはじめたようである。(出発 8:20 — ルサ川 11:10 — トツカリムイ 14:30 — テント地 15:15)

3月13日(◎) テントの外を見るとくもっている。しかしかなり視界は広く。今日の行程の半分程までは、ルート工作をしておいたので、だだっ広い深雪の樹林帯もむだなく進む。それに傾斜もゆるい。たった400m登るだけである。樹林も2~300mあたりの所では我々の身長ぐらいになり、左手のトツカリムイ岳を目じるしに、通称ハイマツ台という773.9mの台地の直下へと向う。そしてこのあたりから又樺の木等の樹林となり、かなりのラッセルに苦しむ。ここからは南へトラバースを続け、予定よりかなり早く11時頃トツカリムイ岳北のコル(400m)に着く。このコルはかなり広く、ルサ川乗越、ルシャ川乗越まではほぼ同じ高さで続いている。樹林帯の中ではあるが念のためブロックをつみ、知床岳へのベースとした。午後からは知床岳アタック用の食糧、装備をととのえアタックのメンバーを、和田氏、三浦と決定した。距離的にいっても10kmもありビバークもしなければならない。私としては好天をのぞんでやまない。(出発 7:15 — トツカリムイ岳北のコル 11:05)

3月14日(◎風強し) さあ今日は知床岳へアタックの日だ。だがテントから見えるものはガスにぼやけた、あたりの木だけである。上の方はどういう状態だろうか。そこでハイマツ台の方に向ってラッセルを兼ねて出かけた。少し登ると樹林は切れた。やはり風がだいぶある。雪も少々降っている。だが天候もこれ以上悪くならないと判断し、和田氏と三浦は知床岳アタックに向い残った我々2名は硫黄岳へのルート工作のため、ルサ川乗越まで出かけた。アタックの様子は三浦に書いてもらうことにする。天気はよくないがアタックと

決定。やはり案じてた通りハイマツ台に着くと B.C(コル) 附近ではほとんど吹いていなかった風がここでは唸りをあげて吹きまくっていた。唯広いだけの何の目標もないこの台地でガスに巻かれたらと地図を頼りにやたらとペナントを張り稜線への下降点を捜す。アイゼンは快くきくが幾度となくハイマツの上の雪が落ち、その間に足がひっかかり苦労する。稜線に出て 100m ぐらいのピークを 3 つ越えるといよいよ知床岳へ最後の 500m の急な登りになる。コルで風を避けつつ 2 回目の昼食とテルモスのココアを腹につめこみ、たばこに火をつけるが直ぐ雪でしめてしまう。すぐ出発。

広く所々岩の出た尾根を風と戦い一步一歩アイゼンを蹴り込み唯上へ上へと登って行く。いつ晴れるとも分からぬ厚いガスがこの知床全体をおおっている感じだ。急な登りが終り頂上下の広い台地に着いた時は風も一段と激しく、ピッケルで体を支えるようにして進まなくてはならず、ガスも濃く、地面と空間との区別もつかず、前を行く和田氏の姿さえ時々ガスにかき消されてしまう程だ。台地の左手は切れ落ちておりそれにそって残り少ないペナントをたてて進むが、全くの視界ゼロ、油断していると切れた所に足を踏み出すほどだ。このガスではピークを確認するのは困難だしペナントももうなくなつた。残念だがピークを目前にして今日はここでピバークする事にする。少しでも風のこない所の雪を掘りツェルトを張る。快適とは言えないが今夜一晩ぐらいは十分過ごせるだろう。明日の晴天を願って荒れくるう風を聞きながらいつしか眠り込んだ。(B.C 出発 7:00 - ヨカタブリー 12:15 - 知床乗越 12:40 - ピバーク地点し知床岳ピーク直下 14:05)

3月 15 日(○⊗風強し) 雪に圧迫されて目を覚すと身体は全く雪の下になっていた。ツェルトは飛ばされて来た雪でほとんど埋まっており、雪の中から押し上げてやっと起き上る。ひざをつき合せなんとかラーメンを食べた。靴をはくのにも一苦労しやっと撤収し、5 分程進むが昨日にも増して強い風と、相変わらずのガスでこれ以上は危険だし、ピークは確認出来なかつたが引き返す事にする。

知床乗越まで来ると風も弱まり薄日さえさしていたが、知床岳はやはりガスに

おおわれ強風が吹きまくっているだろう。後はペナントを求める苦しい3つのピークを越えハイマツ台地へ着いた。そこで少しまよったが、左へ左へと端の方を巻いて行き見当をつけ一気に下り、コールするとガスの中のB.Cから応答があった。テントは全く天国だった。（ビバーク地出発8:50－引返し9:00－B.C 13:45）

3月16日（○⊗=） 1つの目標である知床岳が一応終わり、硫黄山へと向う。ルサ川乗越までは赤布をたよりに進む。これから少しはっきりとした尾根通しなので、ガスで視界はきかないが、小さなピークをいくつもルサ川側を巻いて行く。

400m地点あたりからは尾根も広さをまし、ガスにとざされた樹林帯の連続である。何ピッチもこうした中を磁石をたよりに高い方へ高い方へと進んだ。樹林帯の中なので風は当らないが、雪が深いので4人ではラッセルが大変である。午後3時になっても樹林は切れそうにない。しかし地形からいって予定していた600mあたりにきていたはずだ。考えてみると今日は大部分ガスの樹林帯という変化のない景色の中を歩いてうんざりした。

テントに入るころから時おりガスが切れて青空が顔を出す。気象通報の結果からも明日の晴れるのが期待できそうだ。（B.C出発8:00－テント場（約600m地点）15:00）

3月17日（○-①） 出発して1ピッチもいかないうちに我々は、樹林帯をぬけ朝日を一杯うけて歩いていた。

期待通り晴れたのだ。なんとすばらしい景色だろう。知床岳が初めて我々の前に姿をあらわした。その山肌はすべて雪である。1244.2mしかないと思われない程堂々として半島の幅一杯に広がっている様である。

オホーツクの方はガスでハッキリ見えないが、やはり流水におおわれている。目を根室海峡の方に転じると、雲海で下の方は見られないが、なんとソ連領の国後島の山々がこの知床の山々の一部であるかのごとく目の前に見えるのである。

まだ我々の進路には、硫黄山の火口稜線が高くそびえている。これからはそ

の一番高い方へと行けばいいのだ。あたりはもう樹林のないだだっ広い雪原が広がっている。

昨日までの天気とはうって変わって今日は残雪期にでも登っているようで、暑ささえ感じる。我々は進んだ。しかし考えていたよりも目的地は遠い。1ピッチ、2ピッチ高度を増すにしたがって、前方にはピークがいくつも現れる。1時すぎた頃から右手には又オホーツク海が見えだし、前方の山は目指す硫黄山の第2火口稜線であろう、あの稜線にでるとウブシノツタ川をはさんで硫黄山がその独特な姿を見せるであろう。2時すぎついに硫黄山の第2火口稜線にでた。やはりすばらしい。硫黄山へはこの稜線の少し南のピークから一段落ちた様になって硫黄山へと稜線が北へ向っている。その稜線の中ほどには噴火跡の一部と思われる石の柱が何本もたち、それに雪が氷付いている所があり、これなどは古代宮殿をしのばせる様であり、しばし今までのアルバイトのつかれを忘れてそれらに見入った。

今日のテントは予定通りこの稜線と硫黄山への稜線との分岐点にある1552mのピークの南のコルに設営した。そしてこの日は硫黄山へは分岐点である1552mのピークからは直接下れなくて、このピークの南北いずれかのコルからトラバースして硫黄山への稜線へ出なければならぬということが解った。

テントを設営したところあたりは又、ガスにおおわれ初め明日の天候が心配である。でもまだ予備日を使っていないので少々停滞しても大丈夫。

何としても今回は硫黄山に登らなければならぬ。（テント場出発7:15—第2火口稜線14:05—テント地（1552mピークの南のコル）15:10）

3月18日（水曜日） 昨日の晴天で目をやられたらしい。昨夜から目がコロコロしてあまり眠れなかった。うとうとして目をさますとあたりはだいぶ明るいようだ。ベンチレーターからのぞくと何も見えない。一面のガスだ。やはり天気は2日と続かなかった。だが昨日硫黄山への分岐点である、1552mのピークのあたりを見ておいたので、少しあはれが樂である。

一応アタックに出ることにする。私と三浦の2名で1552mのピーク南のコルよりピークをトラバースして硫黄山の稜線へ出るべくトラバースを開始。今

立っている稜線はものすごい風で少し雪もまじってふきつけている。もちろん視界はまったくきかない。かなりの傾斜のトラバースにかかるてからは、風がまともに吹きつけないのか雪が少し軟らくなり、足場が不安定である。かなり進んだが稜線に出ない。トラバースの途中何度か足下のガスの中に尾根らしいものが見える。そして何度か下ってみたがすぐその尾根らしいものは切れ落ちて、深いガスの中に消えさっている。

そうしているうちに天候は悪化するのでこれ以上無駄であろうと判断し、テントにひきかえした。テントで協議した結果、今度は 1552 m のピークの北のコルからトラバースすることに決めた。テントの中で火事さわぎがあったりして昼食が少々おくれ 2 時再び硫黄山へと向った。1552 m のピークを越し、北のコルからトラバースし、簡単に硫黄への尾根へ出た。そこから細いリッジを行くと昨日見た噴火跡の石柱の前に出た。のぼるすべもなく、その左の斜面をトラバースする。やがて目前にはうっすらと前衛の山とおぼしきものが姿をあらわした。夢中でその頂に登ったが、目指す硫黄山はみえない。あせる気持をおさえ、ガスの晴れ間をまった。劇的に硫黄山はその右半分の姿をあらわした。急いで左のピークに移り、ここから火口跡とおぼしきすりばち状の台地にかなり下降した。その台地では、しばしの間その大変な傾斜の円錐形の山に感激した。さあこれから頂上に急がねばならない。雪はよくしまって気持よく登れる。あと頂上まで 5 ~ 60 m というところから、ところどころ岩肌も出て傾斜はますますきつくなつた。ここからザイルを使って 2 ピッチ、ようやく頂の 2 ~ 3 m 下に出た。頂上まで 2 人ならんで登った。頂上からの景色はすばらしい。何も目をさえぎるものはない。この 1 時間ほどの間にガスがまったく晴れたのだ。まるで我々が頂上に着く時間にあわせてくれたかのように。こうした頂上での一服は、かくべつである。こんなにすばらしく晴れるとはいってこうに考えなかつた我々はカメラを持ってこなかつたのが残念である。だが写真はテントにいる 2 人がとつてくれているだろう。もう 4 時半をまわつてゐる。急いでピスケットを口に入れ下山にかかった。途中むかいの我々がテントを張つてゐる稜線に 2 人の姿をみつけた。夕焼にそまつた山々に彼らの呼んでゐる声